

私と辞書の50年

——思い出すことども——

松岡榮志

はじめに

これまで、縁あっていくつかの辞典、字典、事典の編纂に参加したり、主編者としてかかわってきた。初めて参加した『例解新国語辞典』（三省堂）の編集会議から、すでに40年がすぎた。実は、その前にも、ある辞典のために原稿書きをしたことがあるのだが、それは途中で企画中止になったので、これは勘定に入れないとして、ざっと並べてみると、以下のようになる。

『例解新国語辞典』（編集委員、三省堂、1984年）

『クラウン中日辞典』（主編者、三省堂、2001年）

『超級クラウン中日辞典』（三省堂、2008年）

『漢字海（上、中、下）』（主編者、両風堂、2014年）

『漢詩の解釈と鑑賞事典』（執筆、事務局長、旺文社、1979年）

『中国学レファレンス事典』（主編訳者、凱風社、1988年）

『ユニコード漢字情報辞典』（主編者、三省堂、2000年）

『中国医学史レファレンス辞典』（監修、白帝社、2011年）

こう並べてみると、いささか壮観だが、人生の青、壮年期の大半をこれに費やしてきたことには、幾分か慚愧の念を感じないわけでもない。ここでは、本誌のご厚意に甘えて、その足取りをざっくり振りかえりつつ、その折に気がついたこと、書き残したことを、いくつか綴ってみたい。

1. 愛知大学『中日大辞典』との出会い

大学に入学したのは、大学紛争直後の1971年である。本来は、東大入試のなかった1969年に受験すべきであったが、家庭の事情から中学卒業後、母校で事務補佐員として1年間働いたのと、高校卒業後、もともと芝居の道に進むつもりでいたのを変更したため、併せて2年遅れた。入学したのは、東京教育大学（後に、筑波に移転し、筑波大学となる）文学部漢文学専攻。同級生は13人だが、ほとんどは第二志望であつたらしい。中国との国交もなく、卒業後は高校の国語か漢文の教師になるしかない、という至って人気のない専攻であった。早稲田大学文学部にも合格し、仮入学手続きで入学金と半期の学費などを136,000円払って、「W」のバッジを1個もらったが、迷うことなく教育大に入学手続きをした。なにしろ、国立大学は授業料が毎月1000円で、私立大学の10の1であつたし、家庭教師などの仕事もふんだんにあつたからだ。

名前は「漢文学」専攻ではあつたが、実際には、本格的な中国語学文文学科であった。第一外国語は現代中国語で、週に3コマが必修（2年間）、希望すればもっと授業に出ることができた。「漢文学」専攻だから、「漢文訓読」で授業をするのだろうとタカをくくっていた同級生たちは面くらい、及び腰で中国語の授業を受け、教室の後ろにたむろしていた。一年生の3コマのうち2コマは、東京外語大学から長谷川寛、陳東海先生がみえ、気合い十分の授業をされた。これは、語学の責任者だった牛島徳次先生の、なみなみならぬ意欲の現れだったのだろう。先輩の中から、上野恵司、樋口靖、相原茂といった錚々たる語学の専門家が輩出したのも、宜なるかなである。

私は、もともと日本の古典、とくに「訓点学」をやろうと思っていた。そこで、浪人中に築島裕氏などの参考文献を読んだところ、『文選』などが多数引用されていることから、これは10年くらい中国古典をやっておかなければと、第一志望でこの専攻を選んだ。また、もともと英語や言語学に親しんできたことから、中国語学にも関心を持ち、松本昭先生の趙元任『北京口語法』の授業にも、テキストの湿式コピー（PCBという発ガン物質だら

けで、まもなく乾式コピーにとってかわられた)を製本し直して参加した。

さて、一年生の夏休みには、三、四人の同級生に呼びかけ、「魯迅を読む」読書会をすることにした。今から思えば、随分の背伸びであったが、数日おきに池袋の喫茶店に集まり、各人数ページずつ担当し、輪読した。

辞典は、入学時に牛島先生に勧められたのが、『岩波中国語辞典』と『新華字典』だった。ところが、魯迅の『阿Q正伝』や『狂人日記』を読もうとしたところ、その2冊ではまったく手に負えない。他にも、『漢語詞典』(注音字母 bo-po-mo-fo 配列の古いバージョン)を引いたりしたが、なにしろ中辞典なので、まだるっこしい。

するとある日、時々立ち読みに入っていた大学近くの本屋の一番上の棚に、『中日大辞典』(愛知大学中日大辞典編纂処編)の新しい箱が鎮座しているのを見つけた。「大辞典」という三字に気後れして、何度かためらった後、店のおじさんに頼んで、脚立を使って取ってもらった。そっと中身を開いてみて、驚いた。細かな字でびっしりと印刷され、何と定価「4000円」である。四か月分の授業料だ。さあ、困ったことになった。何しろ、私は貧窮の極みにあり、大学入学時に大学から入学支度金を2万円借り、育英会の奨学金から毎月500円ずつ返還していたほどだ。(もちろん、仕送りなどは一切ない。ちなみに、大学食堂の定食は45円であった。)

その時、私の脳裏にくっきり浮かんだのが、人生の師である若井林一先生のお顔である。先生からは、浪人時代に、英語を中心に、ラテン語、フランス語、ドイツ語なども、厳しく仕込まれた。先生は往年、ライプチッヒやパリに学ばれたが、第二次大戦の強制送還で東京にもどり、長野県の湯田中温泉に疎開しておられた。敗戦後、故あって私の故郷である浜松に「下って」来られ、城の近くで外国語塾を開いておられた。常日頃から、

——欧州では、辞書を編纂することが学者畢生の仕事であり、名誉だぞ。

——辞書は、大きな辞典、原書を日頃から使いなさい。

と学生を叱咤し、高校生はもとより、中学一年生にも『英和大辞典』(研究社)を買わせ、使わせていた。そんな先生の叱咤激励の聲が脳裏に響きわたり、すぐさま『中日大辞典』を購入することに決めた。本屋の主人には、一

週間以内に代金を持って来るからと言って、取り置きしてもらった。月末の家庭教師の給料日になって、ようやく本を受け取りに行ったのである。

この大辞典は、すばらしい学習効果を発揮した。まず、明清の小説語彙をはじめ、清末、民国以降の口語語彙がふんだんに収められている。引用文には、魯迅の作品も数多く引かれていて、引いた単語のみならず、文全体の意味もわかる。魯迅はもちろん、二年生、三年生の時に、牛島先生や鈴木修次先生が『儒林外史』の演習をされたのだが、その授業にもきわめて役立った。どこに行くにもこの辞典を抱えていったため、紙箱はすぐにすり切れ、中の表紙のビニールもよれよれになった。紙箱にはガムテープを貼り、中の表紙は、製本用の厚いビニールを上から貼った。同じく『新華字典』や『岩波中国語辞典』もぼろぼろになって、買い足したり、表紙を直したりした。ただ、文革中に出版された『新華字典』(1971年版)は、紙質も上質なインディアンペーパー、表紙の青いビニールも高品質で、少しも劣化しなかった。

2. 『例解新国語辞典』との出会い

『例解新国語辞典』は、国語辞典である。版元の三省堂は、言わずと知れた辞典の老舗で、英語など外国語では、『クラウン』、『コンサイス』シリーズなどで、明治時代から名を馳せている。もちろん国語辞典でも、『新明解国語辞典』、『三省堂国語辞典』から学習辞典、『大辞林』まで、数多くのベストセラーを擁している。

この辞典の編集に私が加わったのは、1978年だったと思う。中学生を対象とした、これまでにない国語辞典を作るべく、主編者に岳父の林四郎が選ばれた。林は、国語研究所時代に同僚であった南不二男、石綿敏雄、野元菊雄の三氏に声をかけ、「国語学者」というより「日本語学者」の作る最新の「日本語辞典」をめざした。編集作業は、ベテランのT課長、若手のWさんが中心になり、はじめは神田神保町の旧社屋(三省堂書店の2階)、しばらくしてその裏の東京堂ビル、最後に現在の三崎町ビルへと転居としたが、3年以上続いた編集会議は、毎回まさに国語研究所の日本語研究会のごとく、

弁当をはさんで、数時間も続けられた。楽しく、充実した会議だったが、肝心の執筆などは、少しも進まなかった。

中国語学文学専攻である私が、なぜ国語辞典の編集に加わったのか。それも、著者側の事務局（長？）として、原稿執筆以外の編集雑務や取りまとめなど、諸事万般引き受けることになったのか。私が林の娘婿であるので、頼まれたのだろうとよく言われたが、それは必ずしも的を射ていない。もちろん、そうした面もなくはなかろうが、私を是非にと行って下さったのは、石綿先生だったと後で聞いた。

声がかかった時、私は東大の中国語文学の博士課程に進学したばかりで、さあこれから専門の研究に打ち込まなければという矢先だった。その当時、東大（に限ったことではなかったのだろう）には、不文律のような空気（掟？）があった。つまり、研究者をめざすものは、1) 辞典に関わってはならない、2) 教科書を書いてはならない、3) 中国語教育に血道を上げてはならない、というものだった。とくに辞書については、倉石武四郎先生が『岩波中国語辞典』を永年編集して、研究室の若手研究者や日中学院の教員を総動員したため、「一将功成って万骨枯れた」という暗い気分が漂っていた。中国語辞典でもそうであるから、日本語の辞典の執筆や編集に加わるなど、もってのほかであった。しかし、その頃の研究室の就職状況は悲惨なもので、私の上級生は助手を含めて、10人近くが仕事待ちのありさまだった。私も、博士課程を修了しても、どうせ4、5年は非常勤をしたり、バイトで食べつながなければならぬことは目に見えていた。修士課程に入った時、偶然にも日中学院で教えることになったが、給料は薄給で、他に高校生家庭教師をしたり、高校の非常勤講師などもしていた。修士課程入学時に結婚もしており、博士課程進学のに息子も生まれ、とにかく生活を考えなければならなかった。

ところが、あに凶らんや、その翌年4月に、東京学芸大に専任講師として就職することになった。さあ、大変である。授業準備は忙しく（そのころ週8コマくらいあった）、辞書の編集作業は佳境に入るし、日中学院は後樂園に新校舎を建設。しかたがないので、学芸大に月、火、金の週3日、木曜の

午前に日中学院の授業、午後と土曜は三省堂で仕事、と目の回るような忙しさだった。

この辞典では、原稿の内容チェックの他に、副詞と漢字母（項目）の執筆、挿絵の原画描きなど、雑多なことは何でもやった。それがまさか、のちに『クラウン中日辞典』を編纂するための準備になろうとは、夢にも思わなかったが。

3. 『クラウン中日辞典』の編纂

実は、『例解新国語辞典』の刊行直後、ある出版社から漢語辞典（「漢字」ではない）の編集委員にさそわれたが、さすがにこれは丁重にお断りした。まさに、「精根尽き果てた」感があったからだ。

それから、十数年後、三省堂のもと部長のKさんから、丁重な文面の手紙をいただいた。その方は、後に小説や映画化されて著名になった辞典編集のスペシャリストで、某私立大学の教授もされた。何か相談があるとのことだった。

手紙に返事を出し、三省堂の本社に行ってみると、何と私に新しい中日辞典の主編者をやれと言うのである。『クラウン中日辞典』を新たに作るというのだ。さすがに、これには驚いた。私は、いわゆる文法や音韻の専門家ではないし、年齢もまだ40代、助教授である。しかし、それは辞退する理由にはならない。話を聞いているうちに、三省堂側の並々ならぬ意欲が伝わってきた。これは一大事業である。『クラウン英和辞典』は言うまでもないが、1979年には『クラウン仏和辞典』が刊行され、大きな反響を呼んでいた。「クラウン」シリーズに中国語が入れば、中国語もようやく日本で主要な外国語として認知されるのでは、という期待がふくらんだ。

ともかく引き受けてみようと思った。ゼロからやるのは、『例解新国語辞典』で経験済みだ。たぶん、多くの時間と労力がかかるだろうが、誰かがやらなければならない。そこで、読書会仲間の友人白井啓介、代田智明さんに相談し、その頃筑波大学にいた先輩の樋口靖さんを秋葉原の喫茶店で口説い

て、編集委員にお願いした。実際の執筆、編集作業については、日中学院、東京学芸大、バベル翻訳外語学院の教え子の皆さんに声をかけた。

この作業は、7年の困難な歳月を経て、ようやく刊行にこぎつけた。私がめざしたのは、新しい中型学習辞典であった。そして、何よりも「文化の香りのする辞典」であった。

次に、版面、印刷上の新しさ。現代中国語辞典には、他の辞典にはない厄介な問題がある。それは、日本の漢字、簡体字、繁体字、ピンイン、ローマ字などを、同じ一行に並べなければならないこと。ただ並べたのでは、活字であろうとフォントであろうと、アンダーラインが揃わないで、でこぼこになってしまう。今回は、初めてDTPを使って製版した。今ではもう当たり前になったが、その時にはまだ大手の印刷メーカーの大型コンピュータでさえ、漢字を扱いかねていた。私は、1990年からISO/IEC10646 (Unicode) 日本委員会の委員として、世界中のすべての文字や記号を符号化する仕事をしていたので、ここでは是非DTPで製版、印刷してもらおうと考えた。なぜなら、三省堂印刷所は、世界でもっとも先進的で技術レベルの高い辞書印刷技術を誇っていたからだ。『例解新国語辞典』の時にも、漢字の筆順を2色刷で表示するという、途方もない離れ業をやっていた。だが、今回はさすがに「泣き」が入った。初版は、ともかく写植でやりたい、DTPは第2版からお願いできませんか、という悲鳴のような申し出が、編集部を通じて何度も寄せられた。私は、あくまでも譲らず、あちこち手を尽くして、ついに実現してもらった。

もう一つ、強く希望したのは、価格の低減であった。それまでの中型辞典は、6000円台で、大学生（とくに第二外国語選択の学生）には手の届かないものだった。そこで、しぶる会社を説得して、何とか定価を4000円とした。発売と同時に、これは驚きを持って迎えられ、「価格破壊だ」とまで言われた。後に、小型版（とは言っても内容は全く同じ）を2800円ですることができ、ようやく宿願を果たしたことになる。

4. 『超級クラウン中日辞典』

『クラウン中日辞典』が刊行されてつかの間、今度は大型辞典を作ろうということになった。その頃は、すでに辞典名を数字で呼ぶことはなくなっていたが、私たちはこれを「498」と呼ぶことにした。かつては、『例解新国語辞典』はたしか「198」、『クラウン中日辞典』は「298」と呼んでいたと思う。他社に編集上の機密を知られないようにと、書名が最後まで決まらないことも多いので、便宜上、愛称として使っていたらしい。

大辞典と言っても、いったいどんな辞典にするのか。私がすぐに思い至ったのは、ただ収録語数の多さを競うのでは意味が無い、むしろ現代中国人の社会生活、たとえば北京の成人がふだん使っていることばを反映した辞典ができないか、というものだった。

そのためには、語彙調査をしなくてはならない。しかし、現実的には短期間で調査をすることは不可能だ。そこで考えたのは、北京でよく読まれている新聞記事のデータベースを作ったらどうかということだった。そして、迷うことなく『北京青年報』を選んだ。さっそく、友人のデータベース作成専門家に相談し、1999年、2000年、2001年3年間の使用語彙、用例データベースを作成してもらった。

周知のことだが、中国語の場合、漢字一字の全文索引を作ることは、手間はかかるが、それほど難しいことではない。たとえば、『四庫全書』は手書き文字で約8億字あるが、友人の会社は読み取りソフトも自分で開発し、300人で読み取り、同定、校正などを行い、3年間で全文検索データベースを完成させた。ところが、語彙検索となると、そうは問屋が卸さない。まず、どうやって単語の切り出しをするか、言語学者の間では諸説紛々である。友人の専門家は、それを情報処理の最新理論に基づいて解決し、何とほぼ1年間で完成させた。

ただ、残念なことに、著作権などの関係から、あくまでも編集部内部で利用するしかなかった。私の所に、その頃のCD-ROMが3枚残っているが、起動のためのソフトは三省堂にすべてあずけてしまったので、用例などは見

ることができない。今ちなみに、2001年分の語彙表 CD を見てみると、1番「一般（使用頻度7619回）」から76170番「亀板（6回）」まで、7万6千語余りの使用単語が一覧表（見出し字の画数順）の形で並べられている。

かつて、荒川清秀氏からも、せっかくデータベースを作ったのだから、用例などの見直しや改訂にもっと活かしてはと指摘されたが、残念ながら著作権などの複雑な問題があり、ごくごく限定的にしか使えなかったのを、現在でもきわめて遺憾に思っている。

ただ、ひそかにこれまでの辞典、たとえば『現代漢語詞典』や他社の中日辞典の見出し語とこのデータベースの語彙を比較してみたところ、『現代漢語詞典』でもカバー率が約70パーセントであったのに対して、『超級クラウン中日辞典』が約90パーセントをカバーしていたのに、ほっと胸をなで下ろしたことを、昨日のここのように覚えている。

おわりに

『新華字典』初版の編集を担当し、『漢語大詞典』をはじめ、あまたの辞書の誕生に尽力した陳原（1918-2004）氏は、かつて東京で一緒に食事をしながら歓談している折に、微笑みながら「私はことばの世界の無名戦士だ」と語っておられた（詳しくは、松岡著『漢字・七つの物語』を参照）。最近では、中国でも辞書編纂に参加する若手研究者が激減した、と伝え聞く。1本でも多く論文を書かないと、昇進はおろか、現職に留まるのも難しくなってきたとか。

本稿では、日、中語彙の収蔵庫である「中日辞典」を中心に、その外側の事情を思い出すままに綴ってみたが、いずれ機会があれば、語彙や用例など内部の問題についても、辞書編纂者の立場から書いてみたいと思っている。